

令和7年度韓国慶尚北道サマーキャンプ レポート

広島大学総合科学部総合科学科3年

一安皓希

今回の韓国サマーキャンプで学んだことは数え切れないほど多くあるが、本レポートでは主に2つ述べることにする。1つ目は、外国語学習の重要性だ。1週間で数え切れないほど多くの海外の方々と交流したが、その際英語や韓国語を使用した。他国からの参加者の多くは、英語が母語でないにもかかわらず英語を流暢に話して周囲とコミュニケーションを取っており、語学力に長けている姿を見て私も見習いたいと率直に思った。国際交流において、英語を話せること、そして相手の母語を話せることは意思疎通を行う上で重要であることは言うまでもない。今回のプログラムで自身の語学能力の低さを痛感したため、今回出会えた海外からの参加者と再会できるまでに、少しでも語学力をアップさせたい。

2つ目は、直接経験することの大切さである。今回、韓国で数多くの現地の方と関わることがあったが、誰ひとりとして日本に対して不信感を抱いておらず、温かく優しく受け入れてくださったのが印象深く残っている。今年で日韓国交正常化60周年を迎え、両国間の関係も昔に比べて大きく回復しているのだろうと、草の根レベルの交流からも感じる事ができた。また、日本以外からもインドネシア、タイ、ベトナム、中国から参加者が集まっており、たくさんコミュニケーションを取って仲を深めることができた。今まで私は、中国人はこのような国民性、ベトナム人はこのような国民性、というような無意識のうちに固定観念を持っていたが、実際はそうではなくひとりひとり性格は多種多様で、どの国の出身であっても皆同じ人間であり、国籍などほとんど関係ないのだという、ごく当たり前のことではあるが大事なことを理解した。もちろんある程度の国民性は存在するのかもしれないが、この国の人だから、国籍が違うからといった考え方は捨てて、異文化を積極的に受容していく態度が今後求められていくのではないかと考えた。昨今、日本国内でも外国人の在住者が急速に増加し、日本人と外国人の間、外国人と外国人の間で事件が多発しているのを各種報道で目にする機会が多い。文化が異なるため衝突することがあることも当然のことであり、ほとんどの外国人は日本のルールやマナーを守っているはずだ。日本国内で海外の方と関わる際、今までよりも親切に接することを心がけて、異文化に触れる楽しさを感じ続けたい次第である。

最後に、今回のサマーキャンプで多くの学びを得ることができたのは、韓国慶尚北道の職員の方々、カトリックサンジ大学の教員の方々、広島県国際課の方々をはじめとする多くの方々のおかげだ。この度お世話になったすべての皆さんに心から感謝する。